

文学論集



矢内原伊作 エッセイ ③

文学論集

雄 渾 社

矢内原 伊作(やないはら・いさく)

1918年生まれ・東京府立第一中学校・第一高等学校・
京都帝国大学文学部哲学科卒・学習院大学・大阪大学
同志社大学を経て、現在 法政大学教授

***著書・訳書**

「顔について」・「海について」・「抵抗の精神」・「青春論」
・「芸術入門」・「実存主義の文学」・「芸術家との対話」・
「京都の庭」・「室生寺」・「神護寺・高山寺」・「サルトル」
・「ジャコメッティと共に」ほか

リルケ「愛の手紙」 カミュ「シジフォスの神話」
キェルケゴール「哲学的断片」 フールキエ「実存主義」
アラン「芸術について」 サルトル「弁証法的理性批判」
ボードレール「日記」ほか

1975年8月
(新装版) 発行

文 学 論 集

矢内原伊作エッセイ③
矢内原伊作 著

■定価は挿入カード・**発行所 雄 渾 社**
カバーに表示 発行者 垣 本 剛 一

京都市左京区京都大学前 / 電話(075)781-9174〜7 / 振替京都1914

■落丁・乱丁のありました際はおとりかえ致します■

分類1390製品63出版8606

文学論集 ■ 目次

* 実存主義文学論 1

実存主義の文学 3

文学と実存 35

実存主義文学の影響 68

カミュにおける自由の問題 78

* 詩人の思想 101

現代詩と哲学 103

抵抗詩人アラゴン 115

『マルテの手記』について 174

リルケにおける書簡の意味 192

リルケの墓 197

堀辰雄追悼 201

付・角川文庫版 『風立ちぬ』解説 209

* 小林秀雄 213

小林秀雄論 215

その一 理智の舞踊——小林秀雄の創作について 215

その二 政治と文学——小林秀雄からの訣別 238

小林秀雄の『私の人生観』について 266

付・書評二篇 274

埴谷雄高『死霊』／281 堀田善衛『齒車』／288 福田恆存

『……にか』／292 野上弥生子『迷路』と加藤周一

『或る晴れた日に』／296 花森安治『暮しの眼鏡』／303

宇佐見英治『ピエールはどこにいる』／304 宇佐見英治

『モチリアニ』／306 ヘンリー・ミラー『南回帰線』／307

ドニ・ド・ルージュモン『愛について』／309 B・パンゴ

『囚人』とE・ロツシュフォール『戦士の休息』／314

相沢節歌集『極限』／316 新藤千恵詩集『現存』／319

ブレイズ・サンドラール『世界の果てにつれてつて』／322

手塚富雄『ゲオルゲとリルケの研究』／323 山本太郎

『ユリラ』／327 ジュール・ロワ『アルジェリア戦争』／329

遠藤周作『沈黙』／ 333 中村真一郎『空中庭園』／ 336

福永武彦『世界の終り』／ 340 福永武彦『ゴーキヤンの

世界』／ 340 福永武彦『芸術の慰め』／ 343 竹山道雄

『ヨーロッパの旅』／ 345 竹山道雄『京都の一級品』／ 348

シモース・ド・ボーヴォワール『娘時代』『女ざかり』

『或る戦後』／ 350 ヴァレリー『ヴァリエテ』／ 353

江原萬里『宗教と国家』／ 355 林尹夫『わがいのち月明に

燃ゆ』／ 357 ダグ・ハマーショルド『道しるべ』／ 361

ナボコフ『マルゴ』／ 365 森有正『バビロンの流れのほと

りにて』／ 367 森有正『遙かなノートル・ダム』／ 369

加藤周一『現代ヨーロッパの精神』／ 371 加藤周一

『世界漫遊記』／ 373 加藤周一『羊の歌』／ 375 加藤周一

『日本の内と外』／ 377

* 雑記

379

エーケル氏訪問記―読書について― 381

草野心平さんのこと 394

串田孫一君のこと 404

新潮社版 カミユ『自由の証人』あとがき 408

黒い怒り・黒い微笑―AA作家会議の人たち― 413

サルトルとノーベル賞 420

わが文学 425

『文学51』編集後記 428

『同時代』SOURIRE NOIR 435

* あとがき 451

実存主義文学論

実存主義の文学

概観

一口に実存主義の文学と言う場合、それは少なくとも二つの意味をもっていると考えられる。つまり、狭い意味では、それは固有な意味での実存主義を立場とする文学、実存主義を自ら標榜しているジャン・ポール・サルトル並びにその一派の文学を指している。実存主義の文学という言葉は厳密な意味に解すれば、サルトル並びにその一派の文学ということに限定されるであろう。実存主義を自己の立場として主張している文学的立場はそれ以外にはないからである。しかし、実存主義の文学という言葉を広い意味に解するならば、それはキェルケゴールによって基礎をおかれ、ハイデッガーやヤスバ

ースなどによって哲学的に論理づけられた実存という概念に該当し、実存的と呼ばれることのできる一切の文学を包含することになる。その範囲は、当然、実存或は実存的という言葉の内容に左右されるが、この言葉の意味するところが甚だ曖昧であり多義的である結果、実存主義文学或は実存的文学というものを一義的に規定することは極めて困難である。キェルケゴール、ハイデッガー、ヤスパースといった哲学的思想家だけについて見ても、その立場はそれぞれ著しく異なっており、実存或は実存的という言葉の意味も違っている。まして、理論にもとづいてではなく、それぞれの独自の体験にもとづいて創造された文学の性格或は文学者の精神に、実存的という漠然とした形容詞を付することがどれほどの意味をもち得るか、甚だ疑わしいと言わなければならない。キェルケゴールとニーチェ、ドストエフスキーとボードレール、ランボーとロートレアモン、カフカとリルケ、シェストフとベルジャイエフ、またサルトルとカミュ、これらの強烈な個性を実存的と呼んでみたところで、それはむしろそれぞれの精神から個性的なものを取り去ることになるだけであろう。一つの真実の思想、一つの創造的な文学を前にする時、一般的な名称や概念的な枠は碎かれ飛散しなければならない。後に述べるように、一般的な抽象を排して具体的な個性を重んずること、これは実存的態度の重要な要素の一つなのである。

しかし、それにもかかわらず、右に名前をあげたような文学者、前世紀後半から今世紀にかけて文学の世界にあらわれた幾つかの強靱純粋な精神は、それぞれの個性的創造を通して或る

共通の世界をわれわれに示し、実存的と呼んでもよい或る共通の態度にわれわれを導くように思われる。この場合、実存的という言葉は、言うまでもなく西欧の思想家がこの言葉に与えた意味、この言葉によって説明した精神構造にその内容の多くを負うてはいるが、同時にまたわれわれが、われわれ自身の文学体験と生活体験にもとづき、その中でわれわれ自身の思考によってこの言葉に統一的な内容を与えるのでなければならぬ。言い換えれば、西欧文学の或る性格乃至傾向を実存的或は実存主義的として理解することに意味があるとすれば、それはただ、それによってわれわれ自身の生き方が解明され、われわれ自身の文学的創造が前進せしめられる場合のみであろう。実存主義の文学という一般的な呼称も、この時初めて積極的な意味をもつことができる。われわれが単に傍観的な鑑賞者、享受者ではなく、われわれ自身のこの現実、ファシズムと水爆実験の脅威にさらされ、デモクラシーの名の下に搾取と専制が行なわれているこの日本において、人間として生き、自由を自らのものとし、平和を願い、真実を文学的創造の中に結晶させる実践者として、この実践の論理を実存的立場として見出す時、この時のみ西欧文学から実存的性格という共通性を引き出すことが許される。許されるのみならず、これこそが最も重要な課題となる。なぜならそれは知識の問題ではなく実践の問題であり、われわれがこの日々をどう生きるか、その中で文学をどうして創造していくか、という問題だからである。これは、外国の文学や思想を学ぶあらゆる場合にあてはまることであろうが、実存

という概念自身の主体的実践的性格はこのことを特に要求しているのである。大切なのは、実存主義という既にできあがった一つの立場について知ることではなく、われわれが自己自身の立場を見出すこと、それによってわれわれ自身の生き方を深め、明らかにし、文学的創造を前進させることである。

われわれは今日どのような精神的状況におかれ、どのような文学的課題を前にしているのか。概略的な見方をすれば、西欧の近代文学の発展は、その成立の基盤である市民社会の発展に応じて、三つの段階に区別することができよう。第一期はルネッサンスから十八世紀にいたる上昇期のブルジョワジーの文学であり、そこでは人間性の追求、現実の描写、個人感情の解放がそのまま封建主義に対する戦いを意味していた。第二期は十九世紀の文学、もっと正確に言えば一八三〇年及び一八四八年の革命の失敗によって知識人が社会進歩に対する指導的地位を失い、資本主義の一応の安定の下で文学がそれ自身の世界を築くことのできた時期である。ここでは文学者は言わば社会の外に立って社会を観察し、描写し、人間の性格と心理を分析し、芸術のための芸術を追求することができた。第三期は第一次大戦を境として資本主義が帝国主義の段階に移り、ファシズムの嵐が吹きまくり、階級の分裂によって民主主義が危機に陥り、社会と個人の有機的関係は失われ、文学の担い手である知識人が基盤を喪失した二十世紀の文学である。もはや人格の自由とか個性の解放とかという主張は空虚な欺瞞に過ぎず、現実から

隔離された觀察者の位置に身をおいて社会や人間を外から眺めることは許されない。文学者は社会から疎外された自己を意識しつつ、自己の底に虚無の深淵を見、しかもそのような単独者、孤独者、異邦人として社会的現実の中に自ら生き、虚無に直面するその苦悩を通じて人間の全体性を回復し、存在の根拠を指し示さなければならない。或は、一切の基盤の喪失のうちにかえって人間の根源的自由を見、それによって社会と個人との結合を回復しなければならぬ。実存或は実存主義的な立場が重要な意味を帯びてあらわれるのはこの時である。マルクス主義の立場に立つ文芸史家ルカーチは、実存主義は帝国主義段階におけるブルジョワ的意識の表現であると規定したが、この規定は恐らく正しい。ただし、だからと言って実存主義は、ルカーチの言うように必ずファシズムに道を開くものだとは断定するのは誤りであろう。その危険を孕みながら、しかしそこにはまたファシズムの下にある人間の苦悩を把握し、その苦悩を通じて人間性を回復しようとする要素も含まれているのである。いずれにせよ、実存主義は帝国主義段階にあるブルジョワジーを自ら否定するところのブルジョワ的意識の所産である、と言うことはできよう。

現在もなお激しい勢いで音をたてて進行しつつあるこの解体と危機の深化は、しかし言うまでもなく、第一次大戦を機として急に始まったものではない。危機は既に近代市民社会の成立自体の中に含まれていたし、何人かの先駆的な思想家や詩人はこの危機を予見していた。年代

的に見れば、キェルケゴールの『これか、あれか』の出たのが一八四三年、スチルネルの『唯一者とその所有』は一八四五年、そしてマルクスの『共産党宣言』が一八四八年に発表された一八四〇年代が、現代を近代から分かつ一つの目安となるであろう。社会と個人の分裂、この分裂にもとづく両者の解体はこの頃から次第に時代の空にひろがり始めたのであり、右の三つの著作はそのことを象徴的に物語っている。

マルクスはヘーゲルの観念論に対して弁証法的唯物論を確立し、資本主義の諸矛盾を社会科学的に分析することによって階級闘争の理論を樹立したが、キェルケゴールは同じくヘーゲルの観念論を痛烈に批判しつつ、自己の個別的 inner 的現実を主体的倫理的に追求し、苦悩の深淵に下降することによって実存的立場に道を開いた。キェルケゴールにおいて、実存とは何よりも先ず概念的思考の対象ではなく、個別的具体的な自己の存在であり、この存在に強く関心をもちつつ主体的に生きる者である。「客体的思维は思维する主体とその実存に対して無関心であるが、主体的思想家は、実存するものとして自己自身の思维に本質的な関心をもつ。彼は其の思维の中に実存しているのである。」と彼は書いている。ヘーゲルの体系は一切を合理的客観的に説明するが、生きている自分というものを抽象してしまう。だが大切なのは、一切を説明することではなく、自分自身が生きることではないか。自己自身に真剣にかかわる時、人は、一般的な体系や概念のうちに解消することのできないさまざまな激情の混沌に出会う。キェル